

# 美しく住む： ボツワナの再定住地における 狩猟採集民サンの居住地選択

丸山 淳子

## はじめに

南部アフリカの先住民として知られるサン(ブッシュマン)と土地とをとりまく社会状況は、近年大きく変化しつつある。サンは長年にわたって狩猟採集を主な生業とし、遊動的な生活を営んできた人々である。従来、サンの土地利用に関する研究は、彼らが主たる生活域を超えて、広範囲に移り住むことに注目してきた。そしてこのような開放的なテリトリアリティは、降雨量の地域的変異と年変動に対処しやすく、旱魃などの危険性に対しても保険として機能すると論じてきた(Cashdan[1983]など)。

しかし今日、サンの土地利用を規定するものはカラハリの生態学的特徴にとどまらない。南部アフリカ各地で推進される開発計画や自然保護計画のもと、サンは定住化を余儀なくされ、従来我的生活域にアクセスすることも難しくなってきた。こうした動きに対して先住民運動が高まり、サンと土地をめぐる問題はより政治的な文脈で語られる

ことが多くなっている。その反面、新たな状況におけるサンの日常的な土地利用のあり方は見過ごされる傾向にある。そこで、本論ではボツワナの開発計画のもとで生活するサンを対象として、彼らがどのように居住地を選択しているのかを報告し、そこに見られる特徴を論じたい。

## 1. ボツワナの開発計画と土地をめぐる問題

ボツワナでは、国民の大多数がツワナ系の民族で、サンは国民のわずか3%を占める少数民族であり、植民地期からさまざまな権利を阻害されてきたといわれる。独立後のボツワナ政府は、この問題に対処するため、1974年に「遠隔地開発計画(Remote Area Development Programme<sup>†1</sup>)」を開始した。計画の対象者は、公的には「遠隔地居住者」だが、実質的にはサンを想定し、彼らを「主

†1 当初はBushmen Development Programmeとしてスタートしたが、1978年に改称した。



流社会に統合する」ことを目的としている。具体的には、開発計画の拠点を設け、そこへの再定住 (resettlement) を推奨するセトルメント・スキームを採用し、2002年までに全国の約8割のサンが、64の再定住地に居住するようになった。

独立以前、サンの土地利用は公的に認められることはなく、彼らの生活域の一部は、白人私有地 (Freehold land) にもなっていた。そこで、サンに「正式に」居住地を与えるために、セトルメント・スキームは登場した。その後このスキームは、土地に関する二つの政策の進行に合わせて、全国的に展開されていった。まず1975年以降、牛肉輸出のために牧畜業を活発化させ、同時に過放牧を防ぐことを目的とした「牧草地政策 (Tribal Grazing Land Policy)」のもと、共同体保有地 (Communal land) においても牧草地がフェンスで囲い込まれるようになった。次に世界的な自然保護の潮流を受け、1984年には国土の23%が「野生動植物管理区 (Wildlife Management Area)」として、国有地 (State Land) に指定された。また中央カラハリ動物保護区 (Central Kalahari Game Reserve : 以下、CKGR) など国立公園において、住民の居住が厳しく取り締まられるようになった。そこで、これらの地域に住んでいたサンの移転先として再定住地が、次々と設けられるようになった。こうして、当初「サンに土地を与えること」を目的に始まったセトルメント・スキームは、やがて「サンを狭い土地に押し込める」ものとなっていった。

## 2. CKGRにおける遠隔地開発計画と居住形態の変化

では、遠隔地開発計画の進行とともに、サンの居住形態はどのように変化したのだろうか。ここからはボツワナの中央部に位置するCKGRの事例

を検討する。

CKGRが設立された1961年当時、この地域にはグイ語とガナ語を話すサンが狩猟採集生活を営んでいた。彼らは近縁親族を基本に一時的な居住集団「キャンプ」を形成し、離合集散しながら広域を移動していた (田中 [1971])。79年になると、遠隔地開発計画のもとで、CKGR中西部のカデに水場や学校がつくられ、農耕・牧畜、賃労働が推奨された。カデには、各地からサンが集まり、定住的なキャンプをつくった。ところが97年になると、CKGR住民の立ち退きが開始され、2002年には完全退去が勧告された。移住先のひとつとして設けられたコエンシャケネ再定住地には学校や役場が設立され、賃労働の機会提供や食糧配給、年金支給なども徹底されるようになった。また住民には、移住に賛同した順に居住用プロット (以下、プロット) が割り当てられた。

しかし再定住から3年半後には、配分済みのプロットのうち4割が使用されていなかった。空きプロットの持ち主の多くは、再定住地の周囲に住民によって自主的に開かれた「マイパー (ツワナ語で Squatter を意味)」と呼ばれる居住地へ転居していたのである。2001年5月には、成人住民の約4分の1がマイパーに居住していた。耕地や家畜囲いの近くに「出作り小屋」を設けることは公に認められており、マイパーもそれに類似するものとして、容認されていた。

再定住地では住民の多くが賃労働に就いていたが、原野につくられるマイパーでは、牧畜、農耕や狩猟採集活動が営まれていた。こうした生業の違いのほかに、マイパーの居住形態の特色として、人々が「美しく住んでいる (cōē-si Ⅱʔanaa-ha)」という表現がたびたび聞かれた。「美しく住む」とはどのようなことなのだろうか。

### 3. 「美しく住む」

マイパーでは、政府が機械的に配分したプロットとは異なり、その場所や構成世帯などすべてが居住者自身によって決定される。そこで、まずマイパー構成世帯がどのような社会関係にあり、いかにして家屋の配置を決めているのかを明らかにしたい。ここではザンに特徴的な相互扶助として知られる食物分配に注目することで、世帯間の社会関係を検討する。

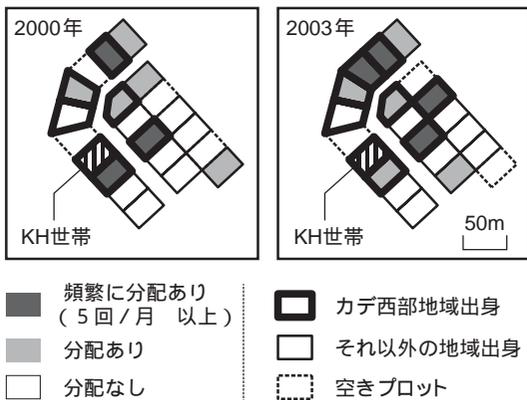
初めにマイパーとの比較のために、プロットに住むKH世帯が1カ月間に食物を分配した相手と、その居住地を調査した。図1にKH世帯の近隣のプロット群を抜き出したが、近くに住んでもほとんど分配をしていない人々がいることがわかる。この人々は、カデへの集住以前はCKGR北部や東部で生活しており、中西部出身のKH世帯とは、もともと疎遠な人々であった。さらに3年後の調査でも、同じ地域の出身者に分配が集中

しているという傾向が確認された。すなわち、従来はその場に居合わせる人々すべてに平等に行われていた食物分配(田中[1971])が、人口の密集する再定住地では、かつて同じ地域でともに生活してきた人々に限って行われていることがわかる。さらにこうした分配関係にない人々どうしが、隣接するプロットに住居する混住状態が生じていることが明らかになった。

一方マイパーに住居するMH世帯が1週間に分配した相手とその居住地を調べると、同じマイパーや隣のマイパーに住居する世帯と頻繁に分配が行われていた。複数世帯が固まって居住するマイパーはそれ自体、生活の基本的な単位となっているのである。さらに、MH世帯の居住するマイパー①とその隣のマイパーにおける家屋の配置(図2)を検討すると、親族関係の親疎だけでなく、分配の頻度も反映していた。すなわち、MH世帯の両側には頻繁に分配するD、E世帯が位置どり、距離が遠のくにつれて分配の回数が少なくなっていた。このように社会関係の親疎が、家屋の配置と一致している状態を指して「美しく住んでいる」という表現がしばしば使われていた。

また別のマイパー②では、2000年から2002年までは、DH世帯の両隣に娘のF世帯、夫のキョウダイにあたるG世帯が位置し、少し離れてGの妻方の姪H世帯が居を構えていた。2001年の調査では、1週間のDH世帯との分配回数は順に27、31、21であった。しかし2003年になると、飲酒をめぐる争いが繰り返されるようになり、最終的にはマイパーが分裂した。このときDH世帯は比較的親族関係が遠く、かつては分配も少なかったH世帯とマイパーをつくり、意見の食い違った残りの2世帯は500メートル離れて別のマイパーを設けた。このように、マイパーにおける家屋の配置は、親族関係の親疎に従った固定的なものでは

図1 KH世帯の分配相手の居住地  
(近隣のプロット群)



(2000年11月16日～12月15日、2003年11月22日～12月23日の調査をもとに作成)

(出所)筆者作成。

なく、日々更新される具体的な社会関係に応じて柔軟になされるのである。

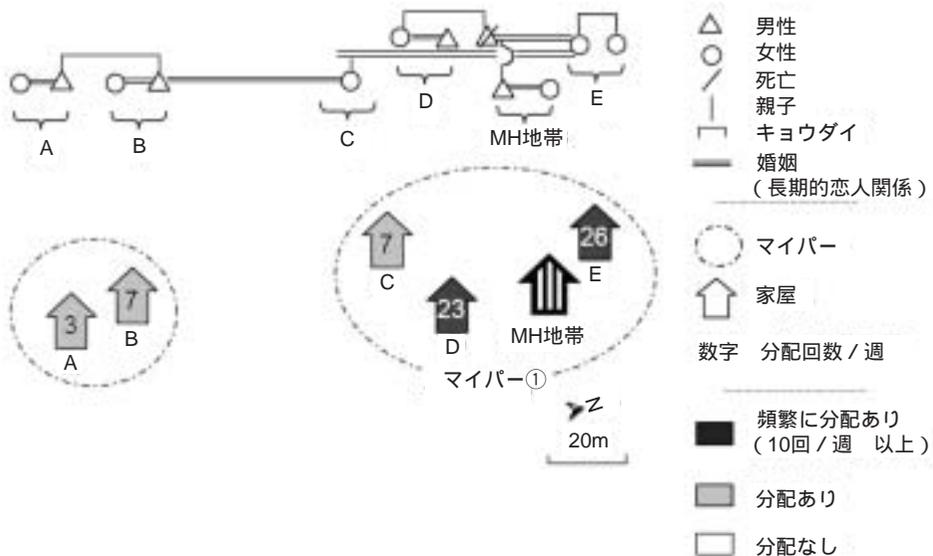
このような互いの関係に気を配った居住地の選択のしかたは、マイパーの位置を定めるときに、より顕著に現れる。2000年8月～2003年3月の間、常時、自分で開いたマイパーに居住していた人々を対象として、そのマイパーの移動状況を継続的に調査した。その結果、マイパーの場所が最大で20キロメートルほど移されることはあっても、いずれも再定住地との空間的位置関係が一定の方向にある土地が利用されていた。このことに気がついた筆者が、南側を好んで利用していた人々に、その年に野生の木の実が豊作であった北側に引っ越さないのかと尋ねると、「これまで一緒に住んだことのない人の近くにマイパーをつくるなんてことはしないものだ」と一笑に付されて

しまった。マイパーを設ける場所の選択は、周囲に住む人々との関係に強く依存しているようだ。

MH世帯は夫がCKGR中西部出身、妻はCKGR南部出身で、それぞれの親族は距離をおいて別々のマイパーをつくっていた。MH世帯は長らく夫方の親族とマイパー①に居住していたが、2003年に妻方の親族と新たなマイパーをつくった。その際、場所の選定には長い時間をかけ、最終的にはマイパー①と妻方親族のかつてのマイパーとの中間地点に新たなマイパーを設けることで合意した。このことを指してMHは、自分たちが社会関係のバランスを考慮して「美しく住むこと」に成功したと説明した。

これらの結果、マイパーの全体的な配置は、出身域の空間的な位置関係を維持したものとなっている。図3はすべてのマイパーの位置と、そのマ

図2 MH世帯の分配相手の居住地（マイパー）



(2001年2月18日～25日の調査をもとに作成)

(出所) 筆者作成。

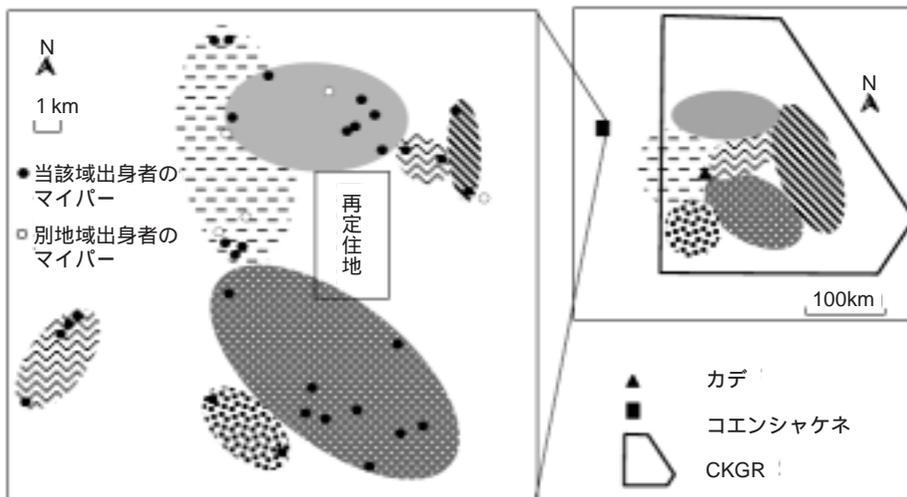
マイパーを最初に開いた人が、カデに集住する前に、主にどの地域で生活していたのかを明らかにしたものである。出身域に応じて緩やかに住み分けがなされていることがわかる。このような住み分けは、カデにおける集住の際にも観察された。それは、各地域から集まってきた人々が、互いの位置関係を変えずに凝集したことで実現した。そして、サンは水場のまわりに複数のキャンプが集まるときには、水場を超えない、水場と他のキャンプ・家屋に間に割り込まないというマナーをもっており、このマナーがカデへの集住状況でも機能したと指摘された(野中[1997])。これに対してマイパーとは、プロットの配分によって一度は混住した人々が、水場のある再定住地から拡散したことで誕生したものである。したがって単にこのマナーに従うだけでは、CKGR内における出身域の

再現はなし得ない。むしろ、彼らがカデにおいて20年近くも半ば定住した状態で、キャンプの空間的な位置関係に注意を払いながら生活してきたことによって、CKGRから70キロメートルも離れた見知らぬ土地で、それをマイパーの空間配置に投影し直すことができたのだと考えられる。

#### 4. マイパーを支える再定住地

これまでみてきたような「美しい住み方」を、サンは「昔からの住み方」として語ることが多い。しかしマイパーの生活には、かつての遊動生活とは決定的に異なる点がある。それが再定住地の存在である。2001年にマイパー①と②で1週間に調理された食事を対象に、1人の大人の1回の食事を1ポイントとして、その食材の入手方法を計

図3 マイパーの位置と、そのマイパーを最初に開いた人のかつての主な生活域



(右図：聞き取りによって得た資料をもとに作成。左図：2003年11月にGPSを用いて記録したデータをもとに作成)

(出所)筆者作成。



算した。その結果、マイパー①では、狩猟採集が13%、農耕牧畜11%、マイパー住人からの供与21%となり、残る半分以上が、政府からの配給(10%)、再定住地で購入(23%)、プロット住人からの供与(23%)と再定住地や開発計画に由来していた。またマイパー②でも、狩猟採集(62%)の他は、配給(7%)、購入(24%)、プロット住民からの供与(6%)と再定住地の存在に頼っていた。マイパー住人は再定住地を日常的に訪問し、水や政府の配給を得ているのである。さらに狩猟採集や農耕などから十分な食料を得られない季節には、再定住地に戻って賃労働などにも従事していた。このような再定住地とマイパーの間の転居は、成人1人の1回の転居を1と数えたとき、10カ月間で125にもものぼった(Maruyama[2003])。

このようにコエンシャケネでは、マイパーと再定住地の双方を組み込んだ新たな居住の形態が生み出された。そして、生活に必要な物資や水を安定的に入手でき、いざとなれば戻ることができる再定住地があるからこそ、マイパーでは、遊動生活ほどには自然資源の分布やその変化に影響を受けず、社会関係に重点をおいた居住地の選択が行われていると考えられる。

## おわりに

狩猟採集生活をおくっていたサンは、雨季と乾季に合わせて離合集散し、旱魃時には頻繁に長距離を移動するなど、カラハリの生態学的特徴に合わせて臨機応変に土地を利用してきた。彼らは制度化されたテリトリーなどはもたなかったが、そのことは無秩序な土地利用を意味するのではない。マイパーにおける居住地の選択を検討すると、サンが従来から、社会関係の網の目のどこに自らを位置づけるのかを常に考えながら、どの土地を

利用するのかを慎重に選択してきたことがわかる。そして同時に社会関係は、居住地の選択によって表現され、また確認されることによって、維持・更新されてきたのであろう。

こうした居住地選択のあり方は、社会関係とは無関係に定められるプロットとの対比によって、「美しい住み方」として現れてきた。そしてそれは、カデへの集住以降続く人口の過密化、さらに福祉サービスによる物資や水などの保障という開発計画が生み出した特有の状況下で、従来にも増して居住地選択における重要な基準になってきた。

遠隔地開発計画に伴う土地の囲い込みや区画化などは、広範な土地の柔軟な利用によって成り立ってきたサンの狩猟採集活動に大きな打撃を与えた。しかしそれでもなお、サンは、開発計画が提供する福祉サービスなどを利用しながら、社会関係を反映させて居住地を選択できるマイパーを生み出した。開発計画によって生業が大きく変わるなか、サンは新たな形で独自の社会秩序の再生産を試みていると考えられる。

## 【参考文献】

- 田中二郎 [1971] 『ブッシュマン』 思索社。
- 野中健一 [1997] 「グイ・ガナ=ブッシュマンの居住に見られる位相とマナー」(日本地理学会1997年春季学術大会要旨集, pp.298-299) および配布資料。
- Cashdan, Elizabeth [1983] "Territoriality among Human Foragers: Ecological Models and an Application to Four Bushman Groups," *Current Anthropology*, 24(1), pp.47-66.
- Maruyama, Junko [2003] "The Impact of Resettlement on Livelihood and Social Relationships among the Central Kalahari San," *African Study Monographs*, 24(4), pp.223-245.

(まるやま・じゅんこ / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)